

鳥羽宮跡第109次調査現地説明会資料

昭和60年7月14日

調査地 京都市伏見区竹田小屋ノ内町
調査面積 約1,500㎡
調査期間 昭和60年4月26日～現在継続中
調査主体 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

1 はじめに

田中殿に伴って造営された金剛心院跡の発掘調査は、昭和52年度以来、数次にわたって実施している。その結果、釈迦堂、寝殿、小御堂、築地跡等と園池が発見されてきた。今回の調査地は金剛心院のほぼ中央に位置し、釈迦堂と考えられる建物跡の南西にあたる。調査地の北及び東側で行なった調査では、建物跡や園池などを極めて良好な状態で検出した。

2 調査成果

今回の調査であらたに発見した遺構は、建物跡3棟、園池、井戸などである。

建物1（釈迦堂） 掘込み地業によって構築された建物跡である。第75・79・97次調査などによって、身舎2間×3間でその四面に庇、孫庇が廻る建物の西南部であることがわかった。これにより建物の全体が確認された。

建物2（阿弥陀堂） 建物1と同様、掘込み地業によって構築された南北方向の建物跡である。建物跡の東側では壇下にならぶ柱の礎石（花崗岩）が11ヶ所で検出された。また基壇上面では、庇・身舎などの礎石据え付け穴が発見されている。第75次調査では、この建物の北辺が一部検出され、雨落溝も発見された。この建物跡は母屋九間四面庇であることを示し、北側に1間の孫庇を加えた平面のものであることが明らかになった。

建物3 建物1と建物2との間をつなぐ建物である。第75次調査では、この

建物の北辺を今回の調査では南辺を検出した。なお、その主体は道路下にあると見た。

図池 4 南北に細長い池跡で汀には庭石が据え付けられ洲浜としている。池の水位は12m60~70cm前後と考えられる。

橋 5 東西方向の橋跡で梁行1間、桁行2間以上の規模である。橋の中心線は、建物2の建物中心線と同一線上にある。

3 遺物

出土した遺物は整理箱200箱を数え、大半を瓦類が占める。その中で注目される遺物として、池中より出土した仏像の一部と思われる木製品や飾金具、ガラス玉がある。木彫の仏像は漆を塗り、その上に金箔を押したものである。金箔は出土時大半がはがれていた。複弁八葉蓮華文を彫った円光背があった。

4 まとめ

今回の調査によって、金剛心院の主要な建物跡がほぼ明らかとなった。そして釈迦堂の南、阿弥陀堂の東側で検出された庭園遺構は小規模であるが洲浜などは丁寧に造られている。また阿弥陀堂の東正面には橋がかかっており、浄土式庭園の色彩が強い。

また、今回池内埋土より金箔の施された仏像や装厳具が出土しており、造営時の様子がより一層明らかとなった。

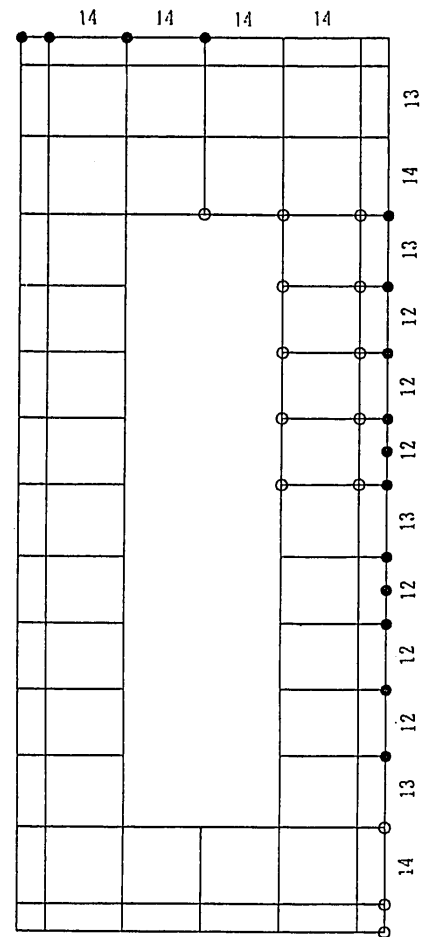
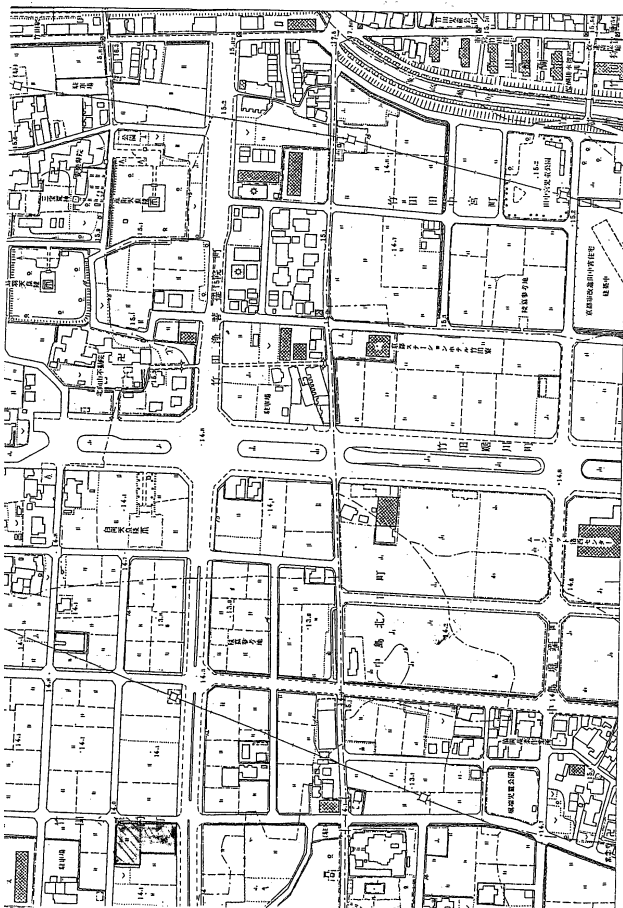


図3 建物2 模式図

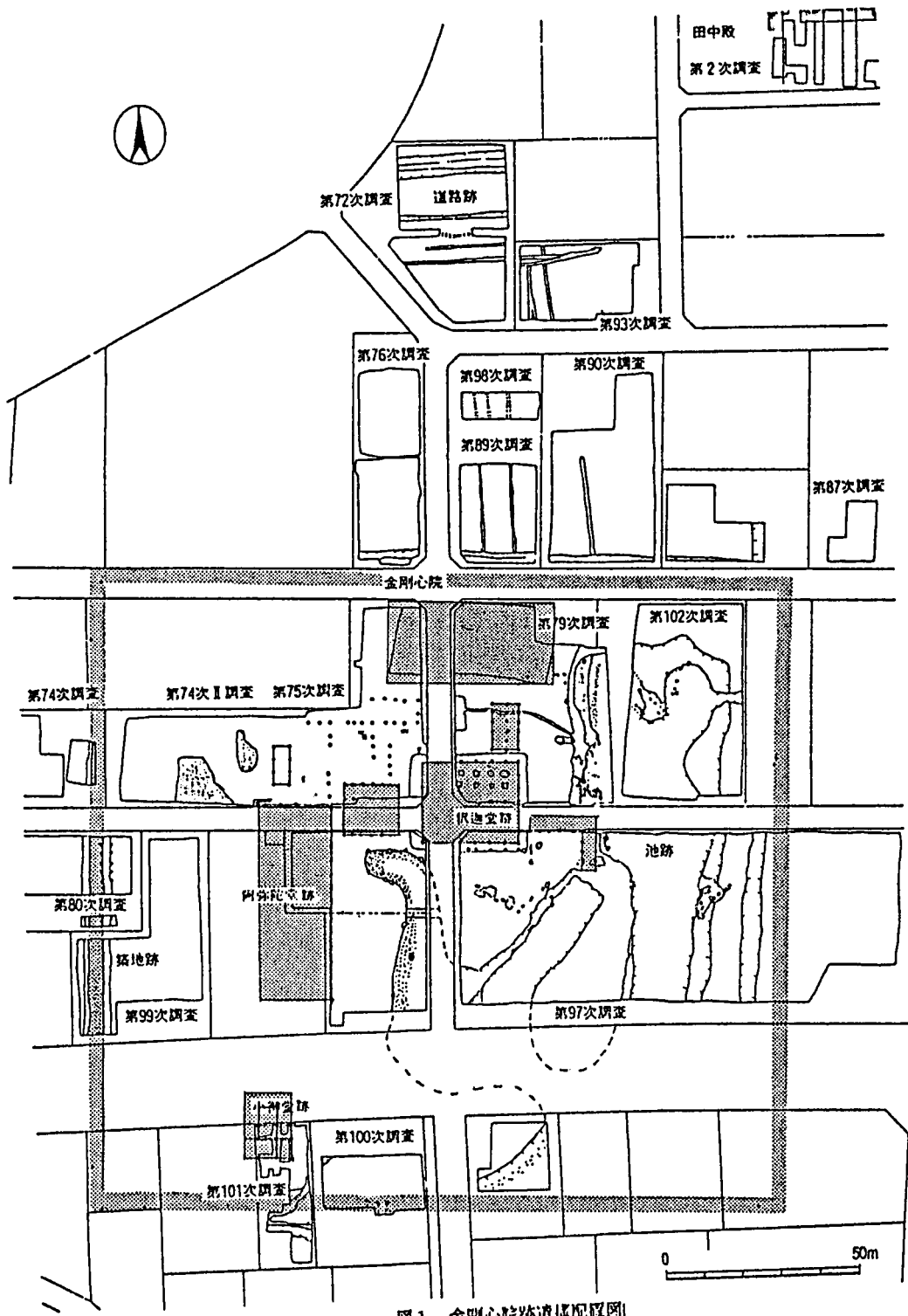


图1 金刚心院遗迹配置图

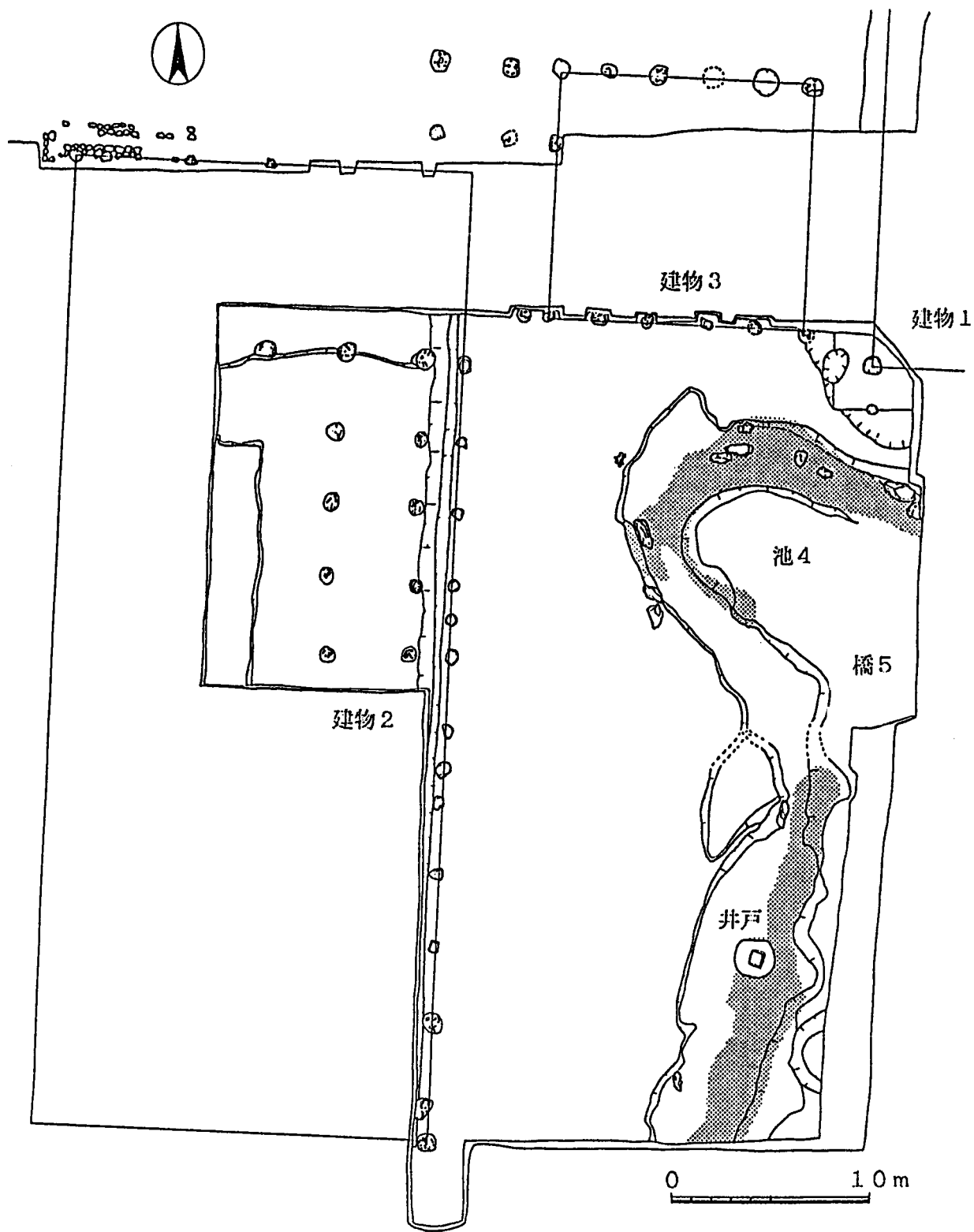


图 2 遺構配置図

鳥羽上皇の御願による今一つ重要な鳥羽御堂は金剛心院である。仁平三年(一二三三)四月二十日に木作始めが行われ、同年十月十八日に棟上げが行われたこと『兵部記』のそれぞれの条に見える。それらにより、先ず位置については、馬場殿北前北、田中南北十六、東西五十六丈点定、(四月二十日の条)ありは、

件所、馬場殿北、田中新御所南大路南、往古田中也、去春点定其所、四月被始木造、(十月十八日の条)

とあり、南は馬場殿と北は田中殿との間にあることを示している。また、その規模については、この院が二棟の御堂と御所とから成り立つこと、

九間四面阿弥陀堂可六六六、一、備後守家明朝臣造堂、三間四面釈迦堂一字六并後殿御所倉屋十餘手、播磨守頭親朝臣奉之、備後所親中納言家成卿、播磨所親宇治入道殿御沙汰也、(四月二十日の条)

とあり、さらに詳しくは、

一、点地之中央南面三間四面釈迦堂、同間敷塚殿、東西渡殿、北面以下宇数十五六宇也、是播磨國所撰、入道殿御沙汰、後殿西頭東面九間四面阿弥陀堂并中門殿、是又備後國所造

とも見える。この御堂の供養願文と元願文とが『本朝文集』に収められていて、二階堂であり、瓦葺であったこともわかり、さらに荘殿についての記述もある。いま兩者を対比すれば、釈迦堂については、

(願文) 瓦葺、二階三間四面堂舎、一字

奉安置皆金色一丈六尺釈迦如来像一林

同八尺普賢文殊二菩薩像各一林

五尺五寸四天王像各一林

(元願文) 瓦葺堂舎、一字二階

安置六尺釈迦

八尺普賢文殊師利

五尺五寸造四天王左右方加籍專像

筋仏後殿、綺堂中央、圓蓋蓋山、模處空会、此外四面、每各々扉、其裏八相、彫一々楹、

阿弥陀堂については、

(願文) 瓦葺、二階九間四面堂舎一字

奉安置皆金色一丈六尺阿弥如来像九林

母屋柱圓給極楽曼荼羅

四面扉圓給九品往生儀式

(元願文) 瓦葺堂舎一字二階

安置六尺釈迦九林彫彫、莊嚴微妙

又極楽界、其曼荼羅、訪佛土儀、畫母屋柱、四面扉繪、九品喜迎、五彩燈々、衆色隔々、

となり、阿文共全く一致し、二棟の御堂が、いずれおとす荘殿されていたことを知ることが出来るし、当時においても藤原頼長がその日記において(『台記』久寿元年七月三日の条)、

伝聞、釈迦堂并御所羅美、法皇歡感殊甚、又院中下日、依阿弥陀堂齋院、増釈迦堂羅麗、

として、とちらかといえは、釈迦堂の方が華麗であったようである。これら二棟の御堂の院号については、供養のあった前々日、すなわち八月七日に習札があった時に定められたもので、『兵部記』では、

今日、習札以後、於殿上、左府以下御堂名号食議、可号金剛心院者、寛信法務存日令撰申云々、

とあり、『台記』では、

伴兼長参新御堂、依習札也……申刻事訖、於殿上羅御相俱定御堂法名、大僧正行玄、僧正行廣、前僧正隆光所撰

申也、名、不知撰撰、被用金剛心院

とあり、金剛心院の号が撰定されている。

鳥羽法皇が崩御あつた後の、保元二年(一一五七)九月二十日に、この金剛心院内で新御堂が供養されたこと、『百鍊抄』に見え、これは、

故上皇奉為母儀女御殿、建立一堂可被安置六尺阿弥陀佛像之由、有御遺言、仍美福門院有御沙汰也、

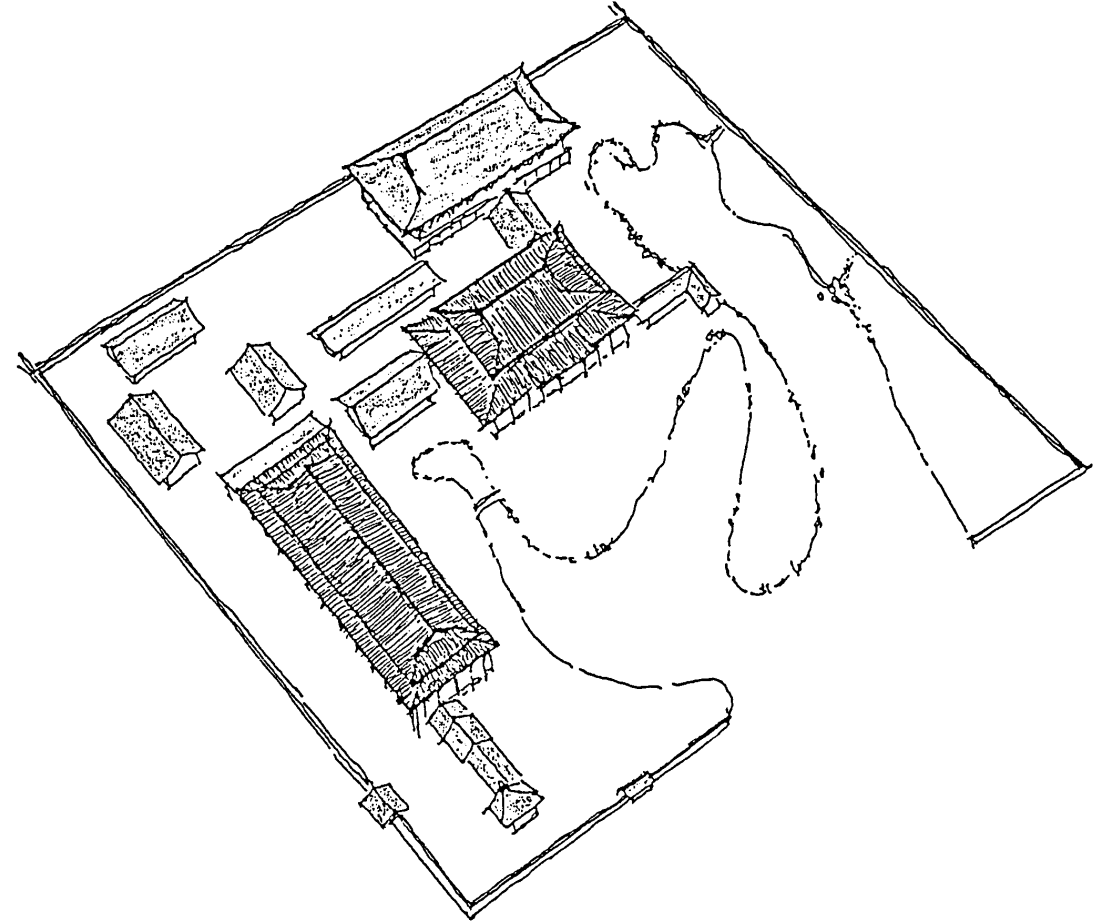
とあるもので、これが鳥羽法皇に関する御堂の中、年次的に最後のものとなっている。金剛心院の造立を見た前年に田中棟敷御所が造営されていた、すなわち、金剛心院は御所と御堂という結び付きを考へれば、この田中殿に附属していたと考えられるし、また御堂にも寝殿が附属して、二重の関係になり、田中殿でもまた別に久壽二年(一一五五)四月二十四日に御堂の供養があつた。『兵部記』では、

鳥羽田中御所小御堂供養、導師真助僧都、讚衆八口云々、

とあり、『台記』では「今日鳥羽光堂供養」とあつて、小御堂すなわち光堂であつて、光堂といわれるからには迎接像が安置されていたものである。

50 45 40 35 30 25 20 15 10 5 1

杉山 信三『院家建築の研究』(吉川弘文館 昭和56年9月刊) 216頁より



金剛心院復原スケッチ